

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

300

第55号

● Contents ●

Topic: The Logic of Preservation and Destruction:What will be happened to Japanese Colonial Architecture in Contemporary Korea? (Part 1) (Hyeon-jeong KIM) 1
보존과 파괴의 논리: 한국에 남아있는 일본식민지시대 건축물의 향방 (1 편) (김현정)**Northeast Asian Reports: Teaching Japanese Culture to College Students in South Korea.....** (Kyosuke KASHIWAGI) 2-3
한국대학에서 일본문화를 강의하면서 느낀 점 (가시와기 교스케)**Members' Forum: A Thought on the Investigation of the Damage to Folk Cultural Properties from the Great East Japan Earthquake and Tsunami in Miyagi** (Hiroki TAKAKURA) 4
동일본대지진과 민속문화재전송에 관한 조사연구에 대해 (다카쿠라 히로키)**保存と破壊のロジック：
韓国に残る日本植民地建築物の行方(その1)**東北大学 東北アジア研究センター 助教
(日韓比較社会・文化論)
金 賢 貞

2012年10月26日、韓国の首都ソウル市を代表する複合文化空間として「ソウル図書館」が開館した。当日だけで1,238名のソウル市民が利用会員証を作った当館は、もともと1926年に日本植民地政府の建てた「京城府庁」の庁舎を建物として利用している。つまり、ソウル市の心臓部に日本植民地時代の建築物が生きつつけているわけだ。今でも「台湾総統府」として使われる「台湾総督府」とは運命を異にし、1995年8月15日に大々的に取り壊された「朝鮮総督府」を思い起こすと、隔世の感さえある。

日本による植民地支配から解放された韓国には植民地時代に建てられた官庁、公共施設、金融機関、店舗、民家など、いわゆる「植民地建築物」(colonial architecture)がたくさん残った。もちろん神社仏閣もあったが、活用の難しさや著しい宗教色・日本色(「倭色」)ゆえに真っ先に取

り壊された。しかし、実用的な植民地建築物は、朝鮮戦争、財政窮乏、国内情勢の混乱などを理由にそのまま利用された。朝鮮総督府庁舎も戦後「米軍政庁」「中央庁」「国立中央博物館」に転用された。しかし、朝鮮王朝の正宮であった景福宮の復元事業を進めた盧泰愚政権(1988～93年)はその敷地内にあった朝鮮総督府庁舎の取り壊しを検討する。だが、巨額の撤去・新築費用の問題で実現できず任期は終わった。そのあとを継いで誕生した金泳三政権(1993～98年)は、マス・メディアで「無能無責」と強く非難される盧政権とは違う推進力と決断力を示す必要に迫られ、「韓民族」の「恨」を象徴する朝鮮総督府庁舎のパフォーマンス的撤去に踏み切った。「総督府撤去、溢れる感激と歓喜」と煽るマス・メディア、「我が民族の胸に打たれた鉄の杭を抜き出す事業」と褒め称える御用学者らによって「保存」を求める声は埋もれてしまった。

しかし、朝鮮総督府がなくなったところで全国に依然として残る数多くの植民地建築物はどうするのか。同じく取り壊すべきか。ただ、取り壊してしまうと、韓国の近代を語る建築物のほとんどが姿を消すことになる。歴史、とりわけ建築史に空白が生じざるを得ないのだ。戦後、歴史を軽視・無視し高層ビル・高層アパートだらけになりつつあったソウル市の都市計画・都市景観の問題も歴史の問題と一緒に、朝鮮総督府撤去後の1990年代末から浮上した。朝鮮戦争後の復興や高度経済成長のなかで棚上げにされ、「植民地問題清算」という名のもとで目障りなものは取り壊して当たり前と考えていた時代から、残して共生することの意味を問う時代へと、1990年代末から韓国社会は移行した。

(つづく)



1909年に建てられた「旧朝鮮銀行群山支店」
(韓国全羅北道群山市)
韓国には全国的に壊れかけ、放置された日本植民地時代の建築物が散在する(2010年6月撮影)

東北アジア通信

韓国の大学で日本文化を教えた経験

蔚山大学校 日本語日本学科助教授 柏木 亨介



こんにちは。私は韓国の蔚山^{ウルサン}大学校で日本文化を教えています。韓国に来て1年半が経ちました。そのあいだでの経験にもとづき、こちらの学生の様子について話してみたいと思います。

蔚山という町

まず、私が住む蔚山^{ウルサン}広域市（以下蔚山）についてお話ししましょう。蔚山は、韓国南部に位置する人口およそ100万人の工業都市です。韓国第二の規模の都市である釜山と、新羅時代の旧都で現在は観光地として有名な慶州とのあいだに位置しています。蔚山は韓国の主要輸出品目の自動車や船舶の工場、石油化学プラントなどがあって、多くの労働者が集まる都市です。町の雰囲気は日本で言う北九州市に似ているように思います。このような地理的条件のため、蔚山は韓国で一番金回りのよい町だといわれています。蔚山がこのような工業都市になったのは、1960年代から始まった産業の重化学工業化政策によるもので、それまでは農村、漁村が広がる光景だったといえます。戦前に撮影された蔚山の写真や映像（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵「渋沢フィルム」）を見ますと、その容貌の変化に驚かされます。かつては捕鯨も行われていたそうです。蔚山と日本との関係は、あの豊臣秀吉による文禄慶長の役（1592-1598）にまで遡ります。蔚山は加藤清正らが明・朝鮮軍を迎えて籠城戦を行ったところで、いまでも町の中心には蔚山城跡が公園として残り、郊外には清正が築いた西生浦倭城^{フセンボ}があって、その石垣（写真1）が今でも立派に残っています。



写真1 西生浦倭城の石垣

蔚山の学生

私が勤務する蔚山大学校は文系理系合わせて11学部（韓国では大学のことを大学校と呼び、学部に対応する組織を



写真2 蔚山大学校キャンパス風景

大学と呼んでいます）を擁する総合大学です（写真2）。理系学部の状況はよく知りませんが、私が所属する人文大学日本語日本学科の場合、学生のほとんどは蔚山出身で、自宅から通う学生が大半です。ただし、親は蔚山ではなくその周囲の慶尚南道や慶尚北道（韓国の行政区分）の出身者が多く、ここに職を得て住むようになったというかたちが一般的なようです。ともあれ、学生は生まれも育ちも蔚山ということで、希望就職先も地元志向がとても強いといわれています。

韓国では中学校から第二外国語の授業があって、そのときに日本語に触れたことがきっかけとなって、日本に関心をもつようになった学生が多いようです。聞く話によると中学校の日本語の授業はとても簡単なものらしいのですが、日本の音楽やアニメなども通すことで関心はかなり深まるようです。なので、大学入学時にすでに相当の日本語会話能力を備えた学生も少なからずいます。

実学志向の学生

韓国の大学生と日本の大学生との大きな違いは、成績への関心でしょう。というのも、韓国では就職するときに大学の成績が評価の基準になるらしく、就職活動も日本のように必ずしも何回かのテストと面接を繰り返すわけではないようです。成績は相対評価によって決まりますので、必然的に周りの学生と競争することになります。試験は学期中に中間と期末の2回あり、みんな真剣な表情で勉強しています（写真3）。この表情はおそらく日本の大学生にはみられないものだと思います。一生懸命に勉強する理由は、良い会社に就職してより良い暮らしをしたいという上昇志向的な考えというよりも、むしろ優良企業に就職しなければ

東北アジア通信

基本的な生活もままならないという危機感にあると思います。社員の給与は初任給からして大企業と中小企業とではかなりの差があるといえます。また社員の採用も随時採用が多く、優秀な学生は学期の途中で就職していきます。ちょうど今の時期（9～12月）は、就職先が決まった4年生が、めでたく職が決まり次週から授業を休みますので成績の件お取り計らいのほどよろしくお願いしますと挨拶に私の研究室を訪れます。

こういう状況ですから、学生は一生懸命勉強しており、語学系の学科の場合ですと語学の上達は早いと思います。学生の日本語会話能力は、日韓の言語構造上の共通性の高さにも因るのですが、とても高いものがあります。ほとんどの学生は私と日本語で普通に会話することができますし、発音やイントネーションも綺麗です。それだけ一生懸命勉強しているのでしょう。一方で、リベラルアーツ的な発想で勉強する学生は少ないように思います。授業科目の選択基準は、彼らが就きたい仕事に役立つような科目を選ぶか、もしくは日本語能力の向上が実感できるようなものを選ぶ傾向にあります。あくまで実学志向であり、他の教員たちも自身の科目がいかに役立つかを説明しながら授業を進めているようです。私がここで唯一残念に思うことは、学生たちが書籍から知識を吸収しようとする意識がやや弱く感じられることです。



写真3 授業風景

海外留学への積極性

韓国の大学に勤務して一番驚いたことで、かつ日本の学生も見習った方がよいと思ったことは、こちらの学生は海外留学に積極的だということです。最近の日本の学生は内向きだと言われていますが、それに比べてこちらの学生は機会があれば積極的に留学に行きます。もちろん、私の学生は蔚山大学校に所属していますし、実学志向的なところがありますので、短期語学留学とかたちで行くことが一般的です。また、日本語日本学科の学生といえども、一部の学生は夏休みを利用したり一年間休学したりして英語圏の国まで英語を学びにも行きます。私が思うに、こちらの学生はどの外国語を学ぶにせよ会話自体は日本の学生にくらべると上手で、積極性があっていろいろとコミュニケーションを楽しんでいるようにみえます。一方、日本の

学生の方がその国の歴史・文化・政治経済等を総合的に学ぼうとする意欲が高いように見受けられます。

親子関係にみえる教員と学生の関係

私がこちらでいまだによく分からないことは、教員と学生との距離感です。学生にとって教員とは尊敬と畏怖の対象であるように見えると同時に、また別の側面があるようにも見えます。先日、ある学生が私に説明したところによれば、韓国には「王と先生と親は同じ」という言葉があるとのことで、私にはますますわからなくなりました（なぜなら韓国人にとっての王と親の存在とは何か私には分からないため）。ほかの教員たちと学生との関係を見ていると、教員は学生に対してひどく怒ることもあるみたいですが、そのあとに励ましたりしてフォローもしています。だから学生は教員に対して小言程度の文句を陰で言うこともあるようですが、実は親しみをもって接しているようでもあります。ひょっとすると教員は口うるさい親のような存在なのかもしれません（写真4）。同僚の教員の話によれば、こういう雰囲気も蔚山ならではのもので、ソウルあたりの大学では違うだろうとのこと。私が先生のことを教員と書いているあいだは、なかなか理解できないのかもしれません。



写真4 ゼミ旅行風景（全羅南道麗水市にて）

研究者としての雑感

以上、私が経験したことをもとに、こちらの学生の様子について紹介してきました。もちろん学生にはそれぞれ個性があって、一般化して語ることはいろいろと難しいものがあります。個性の違いを文化差として論じることが妥当かどうかという問題です。

「(異)文化を語るための視点と方法」について思索をめぐらせて1年半が経ちます。社会のシステムを語ることとそのシステムのなかで生きる個人を語ることは別の次元の問題であるという認識は、現在の人文社会科学上の基本原則ですが、それでもその両者をうまくリンクさせて手際よく語ってほしいという世間の要求に対し、今後どのように応えていくかが、現在の研究者に課せられた使命ではないかと感じながら過ごしています。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。

今回は、日本北方を含むシベリア先住民の民族誌・地域史を主なテーマに研究し、『社会主義の民族誌—シベリア・トナカイ飼育の風景』(東京都立大学出版会、2000年)、『極北の牧畜民サハ—進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』(昭和堂、2012年)などの成果を出している東北大学東北アジア研究センター・准教授の高倉浩樹先生に、3・11東日本大震災後、東北日本の研究者としての使命感や情熱をもって実践してきた宮城県東部の被災地における無形民俗文化財の現状調査について紹介していただきました。

東日本大震災と民俗文化財の伝承に関する調査研究から感じたこと

東北大学 東北アジア研究センター 准教授
(社会人類学・シベリア民族誌学) 高倉 浩樹



2011年秋から、宮城県文化財保護課からの委託を受けて、津波被災地の無形の民俗文化財の被災と復興過程についての調査を行っている。壊滅的な打撃をうけた地域社会が少なくない中で、民俗文化とくに芸能や祭礼、生業やその習俗などが現在どのような状態になっているのかについての調査である。これを通して、被災後の地域社会復興プロセスに政策的に関与・推進する行政や当事者である地域社会に対して、県内沿岸部の民俗文化の被災状況とその復興過程の現状について全体像の提示を目指している。また、民俗文化が被災後の地域社会再生においてどのような役割を担うことができるのか考察・検討するための資料を作成することが目的である。



気仙沼市内の津波被災地の家の基礎におかれた氏神様(2011年10月撮影)

本調査事業が焦点をあてたのは、あえていえば伝統的な領域である。その理由は、津波被災地の多くが漁村・農村などのいわゆる郡部で、生産に直接関わっている相対的には小さな地域社会だからである。それぞれの地区毎に数多くの民俗芸能などが継承されてきており、それらは国・県・市町村などによって無形民俗文化財として認定をうけているものも少なくない。こうした場所で民俗文化は、地域社会の郷土意識や自文化像さらに学校教育や生涯教育といった領域のなかで重要な役割を果たしてきたのである。

調査を実施したのは、文化人類学、民俗学、宗教学、環境社会学、地域研究などの様々な分野であるが、フィールドでの質的調査を重視するという共通性をもっている。調査者20人と学生などによる補助調査者10人がメンバーであり、基本的には調査者と補助調査者が一人ずつ組になるという形で現地にはいった。昨年度の報告はすでに東北アジア研究センター報告5号として刊行した。今年度も継続して調査が行われている。

筆者の専門は文化人類学であり、通常は単独型調査でしかも同じ調査地を数年にわたって継続調査をしながら民族誌資料を収集し分析をおこなっている。それと比べると今回は、多くの研究者・補助調査者を動員する組織型調査であり、しかも数日程度の調査を数回程度のみ行うという単発的かつ拡散的な手法である。長期にわたる継続的調査と比べれば、資料の厚みが量・質ともに十分とは言えない点では否めない。しかし限定された期間で多量の調査者を組織的に動員しながら調査事業を実施した経験は、大変だった側面があるものの、きわめて新鮮で刺激的であった。2011年度に調査したのは20地区である。これを単独型でやるとすればきわめて長い時間がかかる。

もう一つ感じたのは、聞き書き調査の有効性と社会性である。これはある意味で短期型・単発型の調査であるがゆえに可能なこともあった。自分たちが聞き書きした記録自体を当事者と共有できる形で資料化することは、災害という特殊な出来事、一回性の強い出来事においては、有効な資料化の手法であり、その記録自体に強い社会的価値があることに気がついた。また自分自身がまとめた聞き書きが、当事者や地域の行政の関係者が参考にしたいと要望を受けた。自分の学問的手法が少なからずこのような社会性をもっていることを気付かせてくれる機会を得た事、またそのような形で調査地と関係することは責任のあることでもあるが、きわめて刺激的だった。



高台にあり津波被害を免れた山元町天神社にて草刈りをする氏子や神楽保存会の人びと(2012年8月撮影)

聞き書きは、いわば相手の出方に柔軟に応じながら情報を引き出し、それを一定の形に編集していく社会調査である。再現性は低い、質問紙などでは十分把握することができない個人の経験に関わる主観的な記述データを集めるのに最適な方法である。これをチームで体系的に行うことは、地域社会や行政のニーズにも対応できるのではないかと思いついている。なお、この成果については2013年2月23日のシンポジウムを行う予定である。



支援者からの寄贈による新しい鳥居と旗で準備された社鹿半島の白山神社例祭(2012年5月撮影)



今回は韓国特集である。金賢貞さんは日本植民地時代の建造物に対する韓国社会の様々な取り組みについての記事の第1回を提供している。柏木亨介先生は韓国での日本文化講師としての興味深い体験や感想を寄せて下さった。また、高倉浩樹さんは東日本大震災後の宮城県の被災地域における祭礼など民俗文化財継承の調査について報告している。本号は金賢貞さんが編集した最初の『うしとら』であり、今後は楽しみである。(石渡 明)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第55号 2012年12月15日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

PHONE: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/

東北大学東北アジア研究センター気付

FAX: (022)795-7580

E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp